

# 書評

出版 美術 土曜

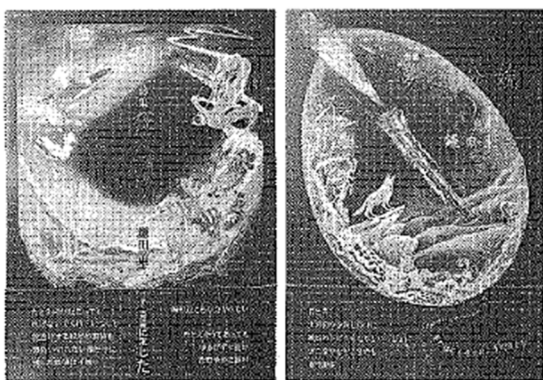
第2詩集  
第3詩集

## 夢通分婉 狂天働地

鎌田東二著

昨年7月に初の詩集『常世の時軸』を世に問うた宗教学者の鎌田東二さんが、今年7月に第2詩集『夢通分婉』、9月に第3詩集『狂天働地』を相次いで刊行した。これによって、へん話詩三部作は完結という。

第2詩集は、昨年11月から半年の間に書いた26編を収録。また、第3詩



集には、今年4月、5月に噴出してきたのかもしいる。何とも旺盛な創作力に、タイトルからも分かるように、いずれの作品集も、語呂合わせといった言葉あそびを用いながら、古今東西の神話や宗教の世界と現代社会を往還する。読者は、時に可笑しみをまぶした言葉のリズムとイメージに身をまかせていけば、お品『ピアニッシモは震えた』には、次のような個法を示しているわけでは

活動だ。詩作歴50年という人だけに、第1詩集の出版が発火点となって、改めて体内の言霊が

改められて、な黙示録的世界に

三部作全体を読み返すと、『常世の時軸』はオウム真理教の事件などに触れられた作品もあり、表面も強烈な印象が強く、かなり終末感が色濃く出ていた。そこには現代文明や社会に対する、作者の絶望感が反映されていたようだ。

今回の第2、第3詩集にも、こうした絶望感や危機感が引き継がれているが、その先の救済に向けての眼差しが感じられる。そもそも、タイトル『夢通分婉』とは、夢を通じて、厳しさに耐えながら何かを生み出す、という含意ではないか。詩集の最後に置かれた作品『ピアニッシモは震えた』には、次のような個法を示しているわけでは

所がある。すべてのいのちがあるものよ。越えるのちだ。超えてゆくのだ。嘆きの谷を下れ。悲しみの海を渡れ。苦しみの岬から飛べ。飛ぶのだ。恐れ

『狂天働地』からは、まさに「天は狂い/地は働く」環境破壊をはじめとした、現代文明の危機的状況が思い浮かぶ。やはり終末意識が作品群の通奏低音になってはいるが、先行きは見通せなくとも進み行け、と背中を押し。へん話詩集/何が起ころか分からない/たえそうであっても/ゆるがずに往け/たおやかに遊べ(『狂天働地』)

『夢通』(A5判・106頁・価2000円十税)、『狂天』(A5判・155頁・価2000円十税)

### 不可思議な黙示録的世界

『夢通』(A5判・106頁・価2000円十税)、  
『狂天』(A5判・155頁・価2000円十税)